

G. Freiherr v. Pölnitz,

Rugger und Hanse.

(Tübingen, 1953)

ドイツ経済史において南独の巨商フッガー家のもつ意義についてはいまさら説くまでもなからうが、ここで紹介しようとするフライヘル・フォン・ペールニッツは最近のフッガー研究における唯一の權威、指導者である。かれは一九三六年以降アウグスブルク市にあるフッガー史料編纂所長として現在にいたり、背烈な空襲下に貴重な史料をまもりつづけ、敗戦後まもなく、Jakob Rugger—Kaiser, Kirche und Kapital in oberdeutschen Renaissance, 2 Bde. (1942) と題する膨大な伝記を刊行した。全く驚嘆すべき該博な史料蒐集のうえに、「ヤコブ・フッガー」というルネサンス的個性を政治・経済・文化のからみあいのなかに完璧なまでに描き出したこの労作は、文字通りフッガー研究の決定版というほ

かはない。これについてはいずれ別の機会に詳しくとりあげることとして、本稿では、この「フッガー伝」の姉妹篇として書かれた「フッガーとハンザ」について紹介することにした。

この書物は(本文一三三頁)、註釈(二〇頁)、史料(七五頁)からなり、本文はさらに、(一)フッガーのハンザ領域への侵入、(二)バルト海市場のためのたたかい、(三)デンマーク王への接近、(四)ハンガリアからの後退、(五)イギリス、ロシアにおける余韻、の五章にわけられて、一四七八年から一六〇〇年にいたる交渉史がのべられている。そのうち、南独資本とハンザ商人の衝突がとくに激烈であつたのでは十六世紀初頭であり、これを取扱つた第一、二章が興味ふかく読まれた。以下この点を中心として考察をすすめてゆくことにする。

\* \*

フッガーとハンザ商業圏との接触は、一四九四年ヤコブ・フッガーがクテカウの鉱山技術者ヨハン・トゥルツォとハンガリア銅山開発のために提携して「ハンガリア共同商會社」を設立したときにはじまる。すなわちヤ

コブは、この会社を通じてハンガリア銅を独占し、その大部分をヴィッスラ河、オーデル河を利用してハンザ諸都市にはこび、さらにズンド海峡經由の船でニーダーラントにおくつて、そこから西ヨーロッパ諸國に販売することを企画したのである。「ハンガリア商會」設立二年後、フッガーは代理店の開設準備にむかつた。まず一四九五年ブレスラウ市が獲得され、一五〇二年ダンツィヒ市に支店がひらかれたが、後者はフッガー家に味方するバルト海における唯一の有力な輸出港として重要な役割を果すことにならう。ハンザ同盟の心臓部リューベック市については秘密裡に工作がすすめられ、ついに一五〇四年有力な市民ヴィゲリンク Godert Wierwich が代理人を承諾した。その際注目しなければならぬことは、教會勢力がこうしたフッガーのハンザ進出を側面から強力に援護している点である。一四九〇年から一五二六年にかけてハンザ地域の実に四〇人ももの司教がその堅信札にともなう教皇庁への諸貢納をフッガーに頼っているし、さらに一五〇二年贖宥状販売請負のことでフッガーはドイツ騎士團との關係をつよめている。そしてこうした結合の援助の

為、教会の商用を請負うという名目でフッガーはするするとハンザ商人の城郭内にはいりこみ、またハンザ商人も別に怪しまなかつたのである。リユーベックに楔をうちこんだと同じ頃、アントワープにも代理店がひらかれ、さらに一五〇六年ダンツィヒとリユーベックを連絡する伸継地としてステッチンにも代理機関が設けられた。かくして一五〇五年前後をもつてフッガーの代理店組織は完成し、北欧への銀輸出・蠟輸入商業、ニーダーラントへの銅輸送が大々的に展開されることになるのである。

リユーベックはそれまでハンザ諸都市と北欧諸国との紛争にまきこまれてフッガーの進出を阻止する暇がなかつたが、一五一一年ついに実行行動に出た。すなわち八月九日ダンツィヒ近海でリユーベック船はフッガーの船荷におそいかかり、ハンガリア銅二〇〇トンあまりを奪ひさつたのである。この挑戦に対してヤコブ・フッガーは得意の外交的手腕によつて事件を解決せんとした。ダンツィヒ市が仲裁に入つたし、教皇ユリウス二世もリユーベックに破門を宣するよう促がされた。皇帝マクシミリアン一世に対してもフッガー擁

護のために働きかけるように工作がすすめられたし、皇帝自身もこれを承諾したが、しかし衰えたりとはいへリユーベック市の勢力はなお南独の一商人のそれをはるかにしのぎ、かれらはニュルンベルク市を煽動して、一五二二年のケルン帝国議会においてフッガーを独占業者であると提訴するに至つた。リユーベックの逆襲は完全に効を奏し、諸侯、騎士、小都市はこぞつてこれに同調して、フッガーは全く窮地に追いこまれた。このとき皇帝マクシミリアンは自己の財政的支柱であるフッガーを弁護して、その事業を「神意にかない誠実・公正なるもの」にして「独占にあらず」とし、危うくこの事件の審議を中止せしめることに成功した。移り気なマクシミリアンはそれ以上この問題にかかわることを嫌つたが、リユーベックは銅掠奪の責任追求が行われぬことをもつて満足し、フッガーもまた周囲の情勢非なるを悟つて後退を決意するのである。こうして第一回の衝突はフッガーの事実上の敗北をもつて終つた。(第一章)

フッガーの北欧商業はこのような損害にもかかわらず機まらずつづけられた。しかもより大きな規模で展開され、そしてそのようにし

てハンザ諸都市を包囲するような体制をきざぎあげれば、リユーベックに対して復讐をとげるのは容易であつたはずである。一五二三年ダンツィヒ代理店が復活され、同年ロシア市場にフッガーの手がのびた形跡がある。また同じ頃イギリス国王ヘンリー八世に金融上の仲介を行い、テューダー朝とアウグスブルク市民とはアントワープ代理店をとおして急速に結合を強めていつた。ハンザ商業の両翼に触手をのぼすと同時に、しかし他方において、フッガーはハンザの宿敵であるデンマークに接近し、これと同盟することに全力を注いだ。フッガーにとつては、ハンザ商業圏を侵略し奪取することが問題ではなく、ズント海峡を中心点とするニーダーラントへの航行権を確保すること、これが第一の関心事にかならなかつたからである。たまたま一五二三年フッガーがデンマーク王クリスティアン二世の家臣によつて銅五〇〇〇ツェントナーを海上で奪われるという事件がおこつた。このときヤコブは教皇や皇帝の援助を糾合するといふような対策をとつていない。むしろこれを代償としてデンマーク王接近をはかり、教会関係の業務、主として贖宥状販売請負を

条件として、ついに同盟することに成功した。一五二五年五月国王はコーベンハーゲンにおいて護衛状を交付するのである。

それからしばらく小競合がつづくが、デンマークとの結合はますます強化され、ヘルシングル Helsingør, マルメ Malmö にフッガーの通信店が設置された。コーベンハーゲン市との関係は緊密化し、またハンザ都市内部ではハムブルク市が南独資本に好意を示してリユーベックを落胆させる。このように徐々に加えられる圧力にたえかね、ついに一五二二年ふたたびリユーベックはニールンベルク帝國議會を舞台に反撃を決意するに至つた。すでに一五二一年ウォルムス帝國議會でニールンベルク市を首唱者としてあの有名な反独占運動が展開されており、リユーベックはこの運動に合同したわけである。かれらはフッガーがゾンド海峡を閉鎖し、西ヨーロッパへの海上交通を阻止しつつあると口汚なく非難したが、デンマークでもイギリスでもなんの反響もなかつた。それだけでなく枢機官トーマス・ウルジーはフッガーの弁護を買つて出、最後に皇帝カール五世は「烈しき書翰」を送つて南独商人を独占攻撃から保護するに至つ

た。一五二三年六月六日ニードラント総督は直接リユーベック市に対してフッガーの銅廻送を許可するように命令し、ここにハンザ商人の敗退は決定的となるのである。

さてリユーベックの惨敗後、ハンザ商人の反撃は全くみられずじまつた。反撃の機会がなかつたわけではなく、実はその後しばらくしてフッガーの北欧商業は根柢から危機にさらされたのであつて、ただハンザ商人の視野の偏狭性がこのチャンスをとらええなかつたのである。一五二四年から二五年にかけてドイツ農民戦争の嵐が吹きすさんだが、この農民の攻撃によつてはフッガー家はあまり損害をうけなかつた。問題はハンガリア銅をめぐるハンガリア政府との紛争である。ハンガリア銅はフッガーの北欧商業の基礎であるだけでなく、実にフッガーの専業の中軸を意味したのであるが、一五二五年六月ブダペストにあるフッガーの代理店は掠奪をうけ、ハンガリア王ルードヴィヒ二世はフッガー・トルツォのハンガリア銅経営の中止を命じ、それを國家管理にうつしたのであつた。もしこのときハンザ商人が鉱山経営の資金と教皇庁への貢納金とをハンガリア王に融通していた

としたら、フッガーの運命は一挙に決せられていただらう。しかしリユーベックはフッガーがスウェーデン鉱山の独占をねらつているとばかり解して、スウェーデン王に働きかけるだけであつた。そのうちハンガリア王の財政難とヤコブの外交手腕によつてハンガリア銅はフッガーの手に回復された。こうしてハンザは南独資本を撃退する最後の機会を逸したのである。(第二章)

一五二六年からヤコブにかわつて、アントンがフッガー家の指導者となるが、これより以降はハンザとの鬭争は次第に影をひそめ、むしろ和解の時期が近づきつつあつた。すなわちルターのなげた宗教改革の波紋はいまや政治的鬭争に性格をかえ、ハンザの指導都市リユーベックにもプロテスタントとカソリック市民との対立が激化し、果ては後者はフッガーに救援を求める有様であつたのである。従つてフッガーの政策は、ハンザよりも、むしろデンマーク王と協調を持統する方向に全力を注ぐことになつた。そしてデンマークを引きつけておくために、ポーランド王、ブランデンブルク公、ブラウンシュヴァイヒ公、イギリス王との結合が強化されたのであるが、

デンマーク、スウェーデン、ノルウェー三国の政情は混乱をきわめ、フッガーはただ手をこまねいて成行を見守るばかりであつた。しかもいくたの紛糾をへて登位したデンマーク王クリスティアン三世は反フッガー的態度をくずさず、しかも新教諸侯の有力な同盟であつたから、一五三九年二〇〇〇〇グルデンの融資を代償としてえられた一時的協調も到底永続的な関係となる可能性はなかつたのである。(第三章)

こうした北欧の政治的不安定、国内における宗教的対立の深刻化、さらに致命的なことに、トルコによるハンガリア銅山の危機などが重なつてフッガーの北欧商業はますます困難となつた。他方においてハブスブルク家との宿命的なつながりは強まり、スペイン政府に対する貸付金は増加の一途をたどり、ここに至つて、フッガーはハンガリア銅を死守するか、スペイン政府に寄生するか、二者択一の岐路に立たされた。さらにイギリス国王との関係は親密に進行し、アントンはヘンリー八世に融資すると同時に、西南ドイツの特産であるバルヘント織物をロンドンにおいて大規模に販売することを計画しはじめた。イギリ

ス経済への浸透、その可能性がフッガーをして一五四五年ついに西欧へ重点を移すべく決意せしめたのである。四八年フッガーはハンガリア銅を完全に放棄し、従つてハンザ商人とのあつれきも漸次消滅してゆくのであるが、しかしイギリス、スペインでいかなる運命が待ちうけていたか、ここで語るまでもなからう。(第四、五章)

\* \*

概要は以上の如くであるが、ペールニッツの立場はこれまでの単純な経済史的観点にとどまらず、経済を政治と個性との複雑なからみあいのなかにとらえているところに特徴があるように思われる。とくにフッガー企業の中軸にハンガリア銅をすえ、国家権力、教会との金融資本的結合をその補助的機能として、明瞭に詳細に描出しているのは、より厳密な検討を要する問題点といえよう。しかしペールニッツは——史料は別として——この交渉史をすべてフッガーの側からみており、ハンザ史家からみればまた別の意見も出るかもしれない。巻末に一括されたくわしい註釈、史料もまたペールニッツらしい好みである。

——瀬原義生——

### 執筆者紹介

上田正昭

鳴沂高校教諭

上横手雅敬

京都大学大学院  
特別研究生

末尾至行

京都大学助手

佐藤 長

京都大学助教授

瀬原義生

京都大学大学院  
特別研究生